

日刊動労千葉

80.10.30
No. 570

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)三五八、九、八、八、三三、二七二〇七

1031 異議審判争勝利 石川一雄氏奪還

狭山中央闘争人

獄中一七年、無実の石川さんの叫びに応え、再審貫徹かちとろう！

一〇月三十一日、われわれは、あの憎むべき寺尾差別判決から六年目を迎えた。

獄中一七年、差別と予断に貫かれた暗黒の二・七再審棄却決定、獄死攻撃に対し、無実の石川一雄氏は、「血の最後の一滴まで闘う」と不屈の獄中闘争を闘いぬいている。

狭山闘争をめぐる情勢は、最終弁論にあたる異議審申し立て補充書の提出をもって、異議申し立て勝利、再審貫徹か、却下かのきわめて重大な局面にいたっている。東京高裁は、弁護団の即事実調べ開始の要求を「今の段階では何とも言えない」と拒否し、早期却下攻撃にふみきろうとしている。

反動鈴木内閣は靖国法攻撃や改憲論議のきわめて挑発的な展開に見られるように、一挙に軍事大国化へ向けた攻撃を強めるなかで、労働者人民を侵略戦争に根こそぎ動員しようとする策動

埼玉県狭山市で中田善枝さんという川越高校一年生が学校を出たまま行方不明となりました。六三年(昭和三八)五月一日のことでした。犯人によって脅迫状が中田家に届けられます。埼玉県警特捜本部は、脅迫状に指定された佐野屋というよろず屋の近くに四十人をこえる警官を張り込ませました。犯人は二日十二時をすぎたころ現れましたが、警官の張り込みに気付いて逃げ出しました。呼びを吹きならしたり、懐中電灯をふりまわしてあとを追いましたが、ついに取り逃がしてしまつたのです。その後、善枝さんは死体となって発見されました。警察は犯人を目の前にしながら逮捕することができず、被害者は殺されてしまつた。マスコミをはじめ、警察の失敗を非難する世論が強まります。それというのもこの年三月に東京で吉展ちゃん事件という同じような事件が発生していたからです。

警察は、面目にかけても犯人をさがし出さねばなりません。しかし、手がかりがありません。このような場合、警察がよく使うのは無実の部落民を「犯人」にデッチ上げ、逮捕するというやりかたです。警察は狭山の二つの部落を見込み捜査し、五月二十三日、部落の青年石川一雄さん(23才)を別件逮捕しました。しかし、警察ははじめから石川さんを、善枝さん殺しの犯人として扱い、ウソ発見機などをつかつて責め立てました。おどかしたり、すかししたり、一たん保釈して、

狭山差別裁判のあらまし



部諸解放同盟実行のバリエーションより転載しました。

すぐ再逮捕するなど、あらゆる方法をつかつて石川さんに善枝さん殺しを認めさせようとしています。これにたいして石川さんは一カ月近く否認しつづけてきましたが、ついに六月二十四日、二七の「自白」をさせられてしまいました。はじめ、警察は三人共犯説をとりませんが、つじつまが合わなくなると石川さんの単独犯行にあらためます。そして検察庁は七月九日、石川さんを善枝さん殺しの容疑者として起訴しました。

裁判は、この年九月四日、浦和地方裁判所ではじまります。内田武文裁判長は、弁護団の申請するほとんどすべての証人と証拠調べを却下してスピード審理をすすめて、わずか半年後の翌六四年三月十一日、死刑という恐ろべき判決をくだしました。内田裁判長は証拠もろくに調べないで死刑の判決をくだしたのです。

同年九月十一日、東京高等裁判所で控訴審がはじまりました。石川さんは二七の「自白」をひるがえし、「俺は善枝ちゃん殺しをやっていない」とさげびました。これ以後、ようやく東京高裁において事実調べがはじまつたのです。

部落解放同盟は、この事件と裁判の底をつらぬくものが部落差別であることを明らかにして、狭山差別裁判取消し、無実の石川青年即時釈放の大衆的なたたかいをすすめています。

「本部」革マル反動分子の狭山闘争破壊介入
「小谷謀略デマ運動」もちこみを許すな！

「本部」革マル反動分子は、かつての水本デマ運動と全く同じ口で「小谷襲撃弾劾・動労防衛」なる革マル翼賛運動を一〇・三一にもちこもうとしている。「狭山」も「小谷事件」も同じく権力の謀略だから同じ視点で闘う。なる革マルの謀略デマ運動にもとづくペテン的「論理」をもって差別主義的に狭山闘争を利用し、部落差別との闘いを冒とくし、セクト的、政治利用主義もあらわに狭山闘争の破壊・介入を策動している。このような介入、破壊策動を断じて許してはならない。八一・三決戦への全力決起をきりひらいた一〇・一九〜一〇・二一闘争の大きな成果のうえに、全力をあげて一〇・三一狭山中央闘争に決起しよう！

を開始している。排外主義・差別主義権威主義の攻撃は、そのための決定的なテコとしてはたらくはじめている。狭山闘争解体攻撃を頂点とした部落差別—人民分断支配の攻撃も、こうした状況のなかで一挙に強められようとしているのである。われわれは、部落民であるというた

だそれだけの理由で、千葉刑務所にとられていた石川一雄氏のくやしさと怒り、再審貫徹・勝利への確信をしっかりとけとめ、この重大局面を闘いぬかなければならぬ。

狭山闘争は、三里塚闘争とならぶ全ての人民の闘いの拠点である。われわれは、三里塚八〇年決戦との固い結合のなかに狭山闘争の歴史的勝利もあることを確信し、全力で決起しよう。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ！